敎

[illegible]諸載の[illegible]ひ心[illegible]
物[illegible]て用ゆる時[illegible]
[illegible]
失[illegible]の地理を志[illegible]導人を
[illegible]其所[illegible]
[illegible]
諸言微中[illegible]

師爲家を繼給ひし中頃三十餘年を經て
時あらはし其孫にあたりて世に現れたる
故堂の新主信時より代々の家格の二字を
給ひしも今を紀元二千六百年の
師宗匠の號を受け詩歌の中に形人あり續て今の
師宗匠の號を受け詩歌の中に形人あり
殊に又年毎に一日曉地蓬萬年
よりも一山岡を取て
元孫の世に十指を動めし門徒三千の

詩人あり其後新家周の世を四海の
題を又石に刻みて和歌の道を明し給ふ
元孫の世に人のみちを八重垣琉球の
珠を得し國し新家京師を梓より先
懷玉を刻て須賀にちんぜんを寄せ
とあるに世を老齢より
無ひ頻に推敲を重ねる
人々に花けをよし

雅頌一すくさは江都へ文をあつめて其序行
ものを以て受教者の嚮く学ぶて深き所を
彫工に命じ梓に鋳しめ其に題辭あらん
るの者和氏隨侯の珠の貴きらめく古人
玉を敬白業と謂るの情に鑑するあるを
知へかはしめ志を立てるするの志ふ
南強居田山人臙脂菴主足

凡例

○古人の章句其事を具せしの編録して世に伝ふ時
格式雖歌形式のハ不分類の事多し一集中雖歌を
交へにあすの者神学の学歌を混じてハ事形一
かゝれを安かして其分類を歌の文学を世人さくにかゝる
俗人所すかんるのを学と志を形り集中其に海を
諸集性所人のまゝ編録をよりて其あるを見るの二十年
の間に為ふ読をいつ所へ
事柄をかゝ所風景一の巻抱あるを

ある歌集の古例なるべしと其事をこの部に論ず

○ 山ざくらを題とせしことも元録享保の人さしてもとめて歌ども其代にてもかなりとの説あり此説測海のおもうことを思へ識し侍るも甚くあらざる説なるべし

乃ち大概を定年

○ 其間より古人歌一とせにても記さしめたるものあるべし

掌類を圖其説あり連綴をもて家圖及び和歌鬼つらゆきあるを所用とせるも一句接あるをあく

○ 祖父の歌のうちも時代享保をかゝへ之を略き出せる

もあり其論を句論部

○ 春林堂主人山守墨堂義柳舎人陸奥義園京條の

流行部昭和月部の明治をもて論部

○ 寛中十六年の稿を改めて濃合を者に有る曲あるも

又原人改味して古人の分量をいりもの所の一部とす

○ 義をもて西園の歌をもの歌を集岩堂の三峰集八句論部宗の歌

あるを意く歌集の歌をもくの年にあるをもあく

○ 歌を全て古語を語家に加へ侍る山井を表をもて家

改定部をもて部を改部を補ひ部と二句

又歌をもて古語を意く一句を家仕を志し世をあり

俗語を和歌部と歌を古語をもて補部の部よあらず

○きて四季の源を能く詠ずるは歌の部を不分別の事歟

いつる日出あるを又接かさきをかく

○春のあしらひ人の国所洋ありさまを八元来詩歌熟世の中

より浮くるこの事をし長年に益あつて所より国所ありを

名をを繋ぎたる抑て志人人と女を詩歌流儀相し給へ

○年来中長恋不絶とある歌を斎宮よりよこ人志人の歌より

あるは詩歌を歌ふ人を知て編いはへ

○如し歌中なひ出る事を七ふる出と云ふ歌あり

雲のことしゆふしめ出きるを見す長を見るはを

あるは風雅の例なるし

○真名書く書涙の出る源の出る所を能く詠ずるは大切

歌は人の形を毫髪も生ずるはさきを古人の心

に意をさ法を出る鳥馬馬の名ひ出る詠てなを言とい

学者裏書法を魅ふ劇歌あるは後の人助よや

○門門を紀往中逢莫の者を法書歌を歌ふ歌は書

句かるを日ふ歌かるを古紀を言ふ歌を繼意也

○ひ言歌家を歌文所歌を陪紀して文意に歌出る

紀より法歌を人歌しあはを古紀人を乃ひ

毛詩より歌を中紀歌冊を和和

の歌の源句を歌冊の人を紀書懐中して

諸歌の部類五巻の一部をふす

○巻数六冊にわかつ

歌の題目部類は丁付あるを其歌ちかく志るし

巻歌の下に天合て何丁目と引合つべし

丁巳歳 春日

松露菴主人

古人五百歌 春之部目録

梅	初丁	柳	二	余は今	三	鶯	四
梅の花	四						
霞							
元日	四	初空	五	春の日	五	鶯	五
鶯	五	春の鳥	五	鶯鳴	五	鶯	五
春の夜	六	春の月	六	春の雨	六	霞の中の春	六
江の春	七	春の野	七	川柳	七	大あく	七
はるあめ	七	春の花	七	凝春	七	春は一	八
春つき	八	蓮華	八	春の暮	八	春の鶯	八

年玉 八
若菜 九

植物之部

子の日 九
若葉 十
雪の花 十三
梅 十四
稗生ず 十五
ちるし 十六
樓木 十六
種おろし 十七
初虫の音 十八

蓬山春 八
雪の子 九
水仙 九
七種 九
芹 十一
柳 十一
下萌 十三
若草 十三
春の雪 十四
蕨の葉 十五
立加木 十五
すくすく紀 十五
蓬角 十六
木瓜 十六
うぐひす 十七
若草 十七
蓬のうた 十七
梅 十八
海棠 十八
連翹 十八
李 十九
辛夷 十九
木蓮花 十九

牛蒡 十九
蕗 二十
蕨 二十
蕗の薹 二十
蕨 二十一

生類之部

蒙 二十一
猫の恋 二十二
白魚 二十三
蛙子 二十三
春鶯 二十三
雉子 二十四
雲雀 二十四
帰雁 二十五
飛鳥 二十五
鶯 二十六
書鶯 二十六
蝶 二十六
鶯 二十六
鶯 二十七
蛙 二十七
田螺 二十七
蛙 二十七
蜆 二十八
若鮎 二十八
子持鮎 二十八
蕨角 二十八

時候之部

春の雪 二十九
保昭 二十九
ぬるむ 二十九
氷生 二十九
春の雨 二十九
春長 二十九
網引 二十九
春 三十
春の月 三十
春の山 三十

風巾 三十一
いかくら 三十一
東風 三十二
春の雪 三十三
春の水 三十四
海苔 三十五
陽炎 三十五
彼岸 三十六
長き日 三十七
汐干 三十八
つちふる 三十九

藪入 三十一
燒野 三十二
春風 三十二
春の日 三十三
春の暮 三十四
淡雪 三十五
糸遊 三十五
御忌 三十六
出代 三十七
曲水 三十八
山焼入 三十九

雉子 三十一
雪間 三十二
雪解 三十二
春の雁 三十四
春の夕 三十四
寒食 三十五
二日灸 三十六
涅槃 三十六
雛 三十八
長閑 三十九
行春 三十九

冴かへる 三十一
残雪 三十二
春の海 三十三
春の月 三十四
おぼろ月 三十四
草餅 三十五
初午 三十六
西行忌 三十七
鶏合 三十八
畑打 三十九
春雑類 四十

都而百五十二題

十六人五百題　夏之部目録

生類の部

ほとゝぎす 二
よし雀 三
水鶏 四
蝙蝠 五
孑孑 六
蚊 七
鵜飼 八

閑古鳥 三
翡翠 三
練ひばり 四
羽蟻 五
蚕 六
蚊ばしら 七
夏の虫 八

老鶯 三
羽ぬけ鳥 三
水鳥の巣 四
てゝ蓑 六
蠅 六
蚊虻 七
鹿の子 八

鶯音を入 三
鷭 四
蛍 五
蟇 六
蛭 六
蝸牛 七

時候之部

更衣 九 袷 九 青山蘭 九 蓑虫 十
ちまき 十 初月 十 早苗 十 夏祭 十
夏至 十一 夏手毛 十一 灌仏 十一 蛍ちる堂 十一
新茶 十一 月惜 十一 みじか夜 十二 青鮫 十二
青き 十二 ねる急 十二 新蚊帳 十二
乃涼 十三 ちまき 十四 ちる蛍 十四 京地 十四
ちいさ 十四 午時 十四 五月雨 十五 ちくさ 十五
夏の雨 十五 五月雨 十六 夏の日 十六 夏の夕 十六
夏祭 十六 夏山 十六 夕涼 十六 色蓮 十七
四季花 十七 ほたる 十七 早苗 十七 青田 十八
四季永 十八 扇子 十八 蚊帳 十八 涼扇 十八

帷子 十九 神風人 十九 涼室 十九 雲の山 十九
夏至 十九 立夏殿 二十 土用 二十 蛍たし 二十
ぬかるき 二十 夕立 二十一 篠早 二十一 升蛍人 二十一
涼 二十二 風の涼 二十三 新月 二十三 心太 二十四
蓮葉 二十四 神祭 二十四 青ちり 二十四 青ちり舟 二十九
汗ぬぐひ 二十五 暑痩 二十五 川狩 二十五 秋近し 二十五
裏の夏 二十六 御祭 二十六

植えもの部

初の花 二十六 蓮の花 二十六 うり植 二十七 蓮葉 二十七
夏山 二十七 青き実 二十七 裏木立 二十七 下闇 二十八
青き実 二十八 学聖義堂 二十八 柳の花 二十八 花柚 二十八
蓮の葉 二十八 青き柳 二十九 樗 二十九 栗の花 二十九

紫陽の花 廿九　いちこ 廿九　忍冬の花 廿九　柿の花 三十
百日紅 三十　蕎麦の花 三十　牡丹 三十　芍薬 三十一
あふひ 三十一　苔の花 三十一　けし 三十一　薊 三十二
竹の子 三十二　萍 三十二　茄子 三十二　[illegible] 三十二
桐の花 三十二　[illegible] 三十二　櫻子 三十三　百合 三十三
栗の花 三十三　[illegible] 三十三　早乙女 三十四　楊梅 三十四
夕顔 三十四　紫陽花 三十五　あやめ 三十五　藤の花 三十五
うきくさ 三十六　河骨 三十六　若葉 三十六　蓮 三十六
[illegible] 三十七　[illegible] 三十七　かきつばた 三十七　若竹 三十七
[illegible] 三十七　[illegible] 三十八
都合五百六十題

花

古人五百題発句集

春之部　南總　醺醐菴亀貝　行成恵山所　校合

花咲て七日鶴見る麓かな　芭蕉翁

京は九万九千くんじゆの花見哉　、

一僕とぼく〳〵ありく花見かな　季吟

花やさく〳〵花の林かな　貞徳

花ちりて浮世は風を敵なり　宗軌

花の風ふく迄咲や滝の池　嵐雪

何事ぞ花みる人の長刀　去来

啄木鳥の枯木にすわる花の中　丈草

許六
正雪
雲水
吉来
賀水
木節
雲坡
史邦
杉風
桃隣
流化
知七

櫻

寝入ふる蝶はさそふに花の嵐かな　鷺文

酔ふすやてふ晴しより花の山　花樟

隠家は鋼に花見る不二の暮　龍雌

まて咲す花の名能やうたふ声　白雌

木のもとに汁も鱠も櫻の郷　翁

咲ちるやさくらか定めむ山かつら　其角

花のつら錦のつるも中櫻　游春

其先のあんし櫻あるもちる櫻　丈草

さくら咲や都は牛の匂ひ哉　洒堂

咲き折て人はとふともむ山さくら　一鉄

人ひとつ花見し日暮の山はなし　未山

埋れ木もさす雛きて出る山櫻　如来

掛る花や一重なからも山桜　咲山

山さくら花を見るもよし　尚丘

丘櫻も鞍地のあら櫻　木因

ちるさくら鶴のさめる夕さくら　自槐

鮎もさくら窓越しかくる匂ひかな　山川

山櫻雲は遠くも櫻哉　桂雛

登りく船上野の櫻散る哉　杉風

山さくら引つく道のにおひかな　紀紀

観音の塔上の櫻咲きけり　徐以

糸桜

[illegible]川の糸桜
是てこそ金地の桜なれ
今入る人の[illegible]し山さくら
[illegible]ふよ桜[illegible]ふ山桜
家を[illegible]出る山桜
一[illegible]の糸桜 [illegible]の姿
[illegible]も糸桜の[illegible]

[illegible]
東園
[illegible]文
宗玉
柳葉
[illegible]

糸[illegible]
[illegible]の糸桜
糸桜[illegible]
[illegible]の花[illegible]

乙[illegible]
[illegible]
[illegible]
尺[illegible]

初桜

[illegible]の[illegible]桜
[illegible]の[illegible]桜
[illegible]の[illegible]桜
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]桜
[illegible]桜
[illegible]

翁
乙[illegible]
千那
和及
一笑
[illegible]
利雪

遅桜

[illegible]の人の[illegible]桜
[illegible]桜
[illegible]の[illegible]

[illegible]角
[illegible]
史[illegible]

元日

[illegible]

元日の日こそ悪しけれ
元日や貴賤十万指四方
元日や時を経の[illegible]
元日や[illegible]の[illegible]
元日や非代の[illegible]
元日や何[illegible]
元日や[illegible]
元日も[illegible]の[illegible]

[illegible]
山川
紫雲

[illegible]
其角
嵐雪
吉来
安武
忠知
[illegible]
[illegible]

初寅

[illegible]
初[illegible]
[illegible]の道　所

嵐雪
友静
[illegible]

十日

[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]日[illegible]

任口
支考
乙由
利牛

初鶏

初鶏や夜[illegible]日　[illegible]のまの恩
[illegible]鶏や時四[illegible]　[illegible]の[illegible]

[illegible]
可風

初霞　我宿の杉ばらさて初霞　西鶴
　　梅花の蕊の紅ぶりうち霞　鉢巻
　　芝浦や車のうしろ初のすき　乾坡

　　わかしと屠めうむや思の春　雪坡
　　さつこのうすう空ツ加ゝ古人より　言水

初霞　初霞風や四海陸あき君うけ代　宗鶴
　　さつこ古風や系外垣も武の数　多酔

初暦　一年もはるに古歌　初むらと
　　昭陵さる敷くさとしやさつこ暦　宗西
　　乙由

初夢　さつこ夢や宿ゝよりいつも君さ年代　春吟
　　初田あや者あ手ほ方と重結花　令徳
　　さつこ者や扨のて孫さ月日の光　安雲

春立　春ゝうや歯かくにうち孫弟の相　許六
　　はうさ月や桂ゝ古陸て　世よ雪坡
　　逢毎ゝうひあ四ゝうと鶴カ春　義
　　刀さそ仏もつれさ一ゝの春　雪秀
　　外整陣や古ゝ引やすむけさの春　龍洞
　　古カ佩て孫ゝ人や乃鶴の春　涼菴

宮賀　社　老々

草もまもめてさしもしらぬの春
朝夕の人もめつらしき春
西垂にうまれうつりて今朝のはる
殖嘯豪すれさりし時の春

義
方
はる

徒人を蒙蒙者てわすれの春
めんしの物をたてうへの義のはる
義の門なる時世春生業也
むの春遠哥公卿やたてう侍
義の春切り侍へ世をはれり
投入りてもも風流し義の春

有德
家國
休南
石嘯

義
嵐雪
雪竹
文鳳
鈞雪
物丹

江戸
の春

江戸の春
陰ひなつ陰あ物あり江戸の春
海辺一朝はあもふるさと江戸のはる

真角
作者
名不詳

福寿
艸

福寿草学こしめてさと紅相はし
懸のあるの色雪ぬ寿艸
めんをもよ尺ふ色後寿草

琴風
扇雪
兎士

門松

はるもの日本めてさと門の松
松かさと年増の家賞人を雄
松雪の義のはるも高雪門の松

德元
其角
去来

大梅の　防川
はるゝ　梅園
尚白

遠国よ梅の花かゝ咲ひしを
さくらめて越の春ゝ咲めてさ咲
北枝

屠蘇　屠蘇さして小窓ゆむ姫のよ
いさ者ゆ屠蘇勧めさむ人ひ者
荷兮

雑煮　西鶴も其ゝ勧ゝて雑煮ひ
反魂の雑煮ゝ食ひ一ゝ花ゝ木
岚雪
李庸

太箸　古箸ゝ命ゝ勧ゝ新ゝ年ゝ
明ゝ月一ゝ日ゝ雪ゝ田俤ゝ
宝暦
知七

つゝ　ゝつゝ雪ゝつゝ消ゝ行ゝ年ゝ
清ゝ川ゝ西ゝ雪ゝの白ゝの梅ゝの
ゝひつゝ雪ゝ山ゝ花ゝの味ゝ覚ゝ人ゝ先
岚雪
徳元
柳居

蓮茶　蓮茶ゝ供ゝ西ゝ行ゝ春ゝの七ゝ草ゝ
ゝゝらゝひゝ供ゝ清ゝ流ゝ蓮ゝ茶ゝ
花ゝやゝ花ゝ蓮ゝ茶ゝ蓮ゝ茶ゝ
蓮茶め誓ゝ連ゝ歌ゝ
菊
山居
岩翁
鬼貫

巴鶴
和文

宗經
筆

何 仏

言文
言明

吉美
拾貨

黒書

本尊
利生
亀蓋

真角
法圓

聖妙
嵐雪
成仏
乙宝

若鶴

若文

若文

若文

若鶴や嶋の中にて拾ふ事
つゝまちて所望の為なり

筆ひたして結ひ
大洋鈴の筆のたゝ
ゆ

何 仏

宗經
筆

寺玉に梅桜の小雪の筆の事
玉やたの風かたもせつ

言文
言明

筆崎や古文ひゝ
て筆やたゝ
ゆ八出筆やたゝ

ゆて松の筆
て遠入 仏所戸
ゆ

吉美
拾貨
黒書

若鶴

水祝

若文

若文や時雨る事ての筆也

つゝ水にて雪の筆をたゝ
若文やたゝ
つゝ水や井戸ゝ

子の日 小松引 七種

子の日しに都へ行ん友もかな　　翁

ひとり寝も能宿とらん初子の日　　去来

金持る大樽揃ふ子の日かな　　丈草

五十日も過て揃ふや小松引　　白尼

此頃は小松職人のさびしさよ　　塵枝

最引子に見せる小松かな　　宇白

七種や梅子で囃す子の日かな　　凞春

那は浜田の聲のよふきこえ　　其角

七くさや明暮へもかねのかな　　北枝

あくまても恋の粉ふいふもの音　　桃隣

薺

ちゐさの手にえるや細め梅かな　　東鷹

なりもくれにもさつなれぬ　　乙由

一とせに一度つまるゝ薺かな　　翁

岩ちるの哉子包ゝ家あかれ　　其角

湯桶ともならぬ誰を流し出すから　　嵐雪

鶴よ此ふりさける薺この根　　杉風

笑われて又もちまするや川辺かな　　素堂

那の置土手よ薺の出るかな　　我峯

俎板の薺の上に雪もふる　　桃也

只僧の昨子や田脈のかな　　弧屋

音の雪薺を薺の咲出し　　野紅

菊

菊

菊 其角
吉来
土芳
楚江
源化
曲翠
紅扶
路通
杉風
曙山
史邦

竹

大内の殿部りくくつう殿うの
きりかもとしたゝ殿に菊殿の
曙そたゝ曙そと土さく殿のつうなり

記傳
素圃
多敏

竹の高殿踏よこしさ山の流
高ひ殿ひ殿ひ殿ひ殿ひ殿ひ
我ひと鄙の殿ひ殿ひ殿ひ
稽さ出て殿ひ殿ひ殿ひ殿ひ
竹つゝの陸ひ殿ひ殿ひ殿ひ
白玉の殿ひ殿ひ殿ひ殿ひ
時しそこに入ひ殿ひ殿ひ殿ひ

其角
惟然
翠雨
文叶
和丹
蚊嶺
山岳
工家

梅

梅の花にのつぴきならぬ山路かな　芭蕉

山里は雪ふる時ぞ人恋しき　梅の花

形のうつくしき坂の上にあやうき茶屋

うめ一つ見て一杯いくの山ぶし

蔵王堂の眺望　梅の白ひび

一所ずつ白梅の白ひび　去来

横ぶとに咲き咲きつゝ　凡兆

ちりをはらひあぬ梅の一重ひび　尚白

梅さいて出ばさにさて梅の花　桃隣

用にたて西行ぶし　梅の花　蓼太

梅の香や酒のさかなに鶴の羽　猪雄

うめの花に鶴ぶしの白ひび　茶卜

梅の花

嵐雪は梅の花にて梅の花の白ひび

大原はすべて梅の白ひび

梅ちりて雪ふる時の山ぶし

うめ咲て雪ふる時の山ぶし

寺の名に梅の花ちりて

うぐいすや梅の花にて梅の花

白梅や墨の香ふかく夜の梅

十八の夏に雪ふる梅の花

西行の歌に雪ふる梅の花

湯の花の蓋とぶ梅の花

梅さきて門寺ふる仏の花

梅の花

冊子
宇白
宇春
一鼎
雪中
急田
和川
乙史
柳北
多賀
士明
百明

柳

八九間空て雨ふる柳かな
傘に押しわけみたる柳かな
志はらくは浪をまたくる柳かな
西山ゆひて志やま陰や柳かな
あんのりさく花のあふちに柳かな
木曽の脚を押わけ流る〻柳かな
風の如く身を流る〻柳かな
流れしよ雲打物ちる柳かな
五六人挿木して志はらく柳かな
人あての中へ志もへやかるき柳かな
動ていの流し跡かな柳かな
近寄るを押し見えぬかや柳かな

翁
同
去来
野坡
琴風
野水
湖春
野紅
讃岐
東児
素因

川なみなえもとくれ柴舟かな
泥よけの人当りけり柳かな
折れぬすゝは流る〻柳かな
柳の生身のうちふりかし哉
青柳や二筋三筋老木の里
いつかしき中に芽ぶき柳かな
青柳や猫よりかるき柳かな
沢蟹のおちかゝる柳くの形
青柳や地をともにかる〻風の岸
形見なりけり有て寄の柳かな
脇構てあそばしのめくる柳かな

山居
鉄丸
諸言
瑞石
柳居
乙由
祭鯨
紫紋
春何
吉備
而竹

野亮　蓮否
下苔　時雨
美州　百合

山茶の花一ッ咲き出よ野亮坂
宇治の遊び仕舞ひ出す夏
大つ茶の盃とつ人とり野亮うり
茶と茶を人まつ人まぬ野亮坂
下苔野亮の出るまる朝の下
下とえ野亮うくの色の出る時
美州野亮坂の花の蓮
つの州やまと紀州の相の国
美州の山茶　地茶の三つ形紀
つの茶野亮　出塚の深を雨垂
美州野亮坂のうて生の美

山茶　美州
風呂　曲翠
時雨　百合
異州　時雨
物長　利生
太垂　吉来
文考
洞来
桂士
柳居
号破
四子石

撞

美さ落ちる長あて野亮坂うて野亮撞
野のかるつて野亮撞の形
大寸深掃うて野亮撞小
文の深ハ出てもを出ず
一冊ハ落ちるやはり書の赤つ玉
号の書を絶て紫陽の撞う形
取りて尺ちや撞ちの形
雑やあ出ずうしてず地ち撞
みて出て奥山撞深出り
地ちハのかうて笠ち撞小
深て出ず野亮撞ちの形

紅梅

木の実

立春

芭蕉の葉

菅

種

蕭

蕭

五架

す

菊

峡多
廣重

菊
壁多
園田
秋色
舟多
百黄
涼花
之道
百明

歌多

時雨

菊

園治
兎楽
百明

海女
軍物
多文
稚毛
支考

蕎麦
支考

木瓜

萱葡

樓木

桜川や[illegible]して[illegible]木瓜の[illegible]
木瓜の[illegible]咲[illegible]時に[illegible]
花茎に[illegible]や[illegible]の[illegible]
足の無き木瓜に[illegible]

言[illegible]角[illegible]
川[illegible]や[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]樓木[illegible]
樓木[illegible]

桜誰　旦郎　梅至　山川
尚[illegible]　桂[illegible]　嵐[illegible]　[illegible]　一菱　[illegible]

獨活

茶摘

[illegible]の獨活の[illegible]
日の[illegible]猫の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]茶つみ[illegible]
山[illegible]茶の[illegible]
[illegible]
[illegible]
晴の[illegible]
[illegible]茶を[illegible]

其角　杉風　一桐　[illegible]山　[illegible]
去[illegible]　仙化　[illegible]　[illegible]　[illegible]

草の名種類

草の名の中に様あり郊山
形は似ても似つかず
葉の形や大人のやうに
形の名や赫奕として
草の名に似て見れば
草は形や色ある事の名

種類わけし様をさるに
出しつれて出しためる
種なひて決まるや
めでたき物もかたり種類

其角　史邦　嵐雪　桃居　苔蘇　尾明

野角　嵐石　尚白　苔蘇

桃

鎌倉の海道人を取し桃の汁とる
みな物に出る世を流しての名
菊の花や香の色くれし名
かりそめに生えて桃さく花は
世の中にしく名ある桃の色
赤き桃や花も出れば名の
麻の種なる年々桃の名
出でそえて咲まし花の色
家ひとつ植てさて桃の名
抑桃やめでたき種の実
垣根にさく花の咲まれり
代々の草いやしや桃の名

支考　北枝　孤屋　仙濃　李由　桃隣　利牛　荊口　丈艸　柳居　芳宏　尾明

海棠　重複　海棠

連翹　連翹中抑の義なり　尚白

梨の花　梨の花の白き事なり　尚白

李　李の風流なる事を詠じたる句なり　尚白

李夷　李夷の風流なる事を詠じたる句なり　連雪

未蓮の花　未蓮の花純白なる事を詠じたる句なり　巴人

芙蓉の実　芙蓉の実の四角なる事を詠じたる句なり　連雪

苗代

苗代をみて居る蛙のかはづの跡
跡かりやうれしなにも跡なし嫁
苗売絹や宗寺の塔の水かゞみ
名残て麦のめ芽しる苗代田
あかしろに咲るゐのすゝき
苗代や仁王の脚を取足の跡
跡いしろる世界ちりちり見
泥亀や赤しろ名る蛙ひ
様の鳥に苗代みえや折あふ
苗代や板の脇にし折松菓
跡かしろや種をひたす蛙の
井田売縄や支蘇かまうしてみかはゞ

支考
許六
未迹
文考
子英
野坡
雨螺
史邦
尚白
嵐竹
柳梢
冬絲

蕨

雉

菫

拘火の為すると遊ぶしらじ
色のし焼野に出て蕨の跡
早うし山や是は山のぬしらう蕨
一人の見らしいおや拾くのしち
蕨売の道やかうしいの丈草

雉鳴ゐるちらひやすき行燈ひ
雉の声も遠き松ひ
草陰に高みなしの蕨の道
風はして去ゆくさり菫の塚
山路ちの菫ほとすみれ
菫ほしや跡かなかり
野路の色作ちゆるかりし

嵐雪
曲翠
正秀
洛純
即明
史邦
岩翁
蒲羅
杉風
卯七
宗雅
丈遊

山時鳥

[illegible]

獨獨

[illegible]

鶯

鶯や餅に糞する縁の先　翁
うくひすや柳のうしろ藪のまへ　同
鶯の身をさかさまに初音かな　其角
うくひすに起し起する朝ぼらけ　嵐雪
鶯や雀飛付く藪うつり　去来
うくひすや鼻あかき餅の風呂上り　史邦
鶯や鶉来にての里へ行き　尚白
うくひすや神木ふかき社の加茂　運之
鶯の巣に出口見らる谷の底　素龍
うくひすや流れて流て梅の花　北枝
鶯の帰てきやうて鶯の分息　如行
うくひすの一声も気を入りけり　利牛

鶯や二尺五寸の菊の兎　曲翠
うくひすの声でめづらし雁渡る　正秀
鶯や古巣も見ゆる庭の竹　土芳
うくひすの啼ところへ山風や　凡兆
鶯や飛び移る梢ににくし小田の出　乙州
うくひすの涸へもなし竹の巣　丈草
鶯や新の雫に巣のゆら続　柳吾
うくひすや浴身あかりの菜の葉　丈竹
鶯や竹の長葉を踏おとし　荷兮
うくひすの若き体まで流しけり　野水
鶯や四海の熟きを吐くらん　季吟
うくひすを吹き残す松の雪　芦由

猫の恋

猫の恋竈のうしろひるうち
昼寝して夢を深き中猫の恋
猫の恋初手のあかるく峰て恋形う
こゝろ恋まもなくうれ猫のしひ
恋をしたる猫の恋ろしま
宵しなれしかるを猫の恋
世つゝ恋を恋をされ形う猫この恋
恋影恋なる形ほく猫の恋
恋られ死い例しも恋られ猫の恋
猫恋対を猫恋て猫この恋
恋ら恋て嘆恋ら猫ら恋
猫の恋猫この恋恋の猫

義
寺来
壁堂
会庭
秋色
詩人
恋以
恋恋
恋邦
恋発
恋恋
石恋

白魚

恋ら恋めるひの恋しう恋は
恋ゝとの一かさすりや潮恋恋と
白魚の恋恋白ひ中杉の恋
恋ら恋ちをの白き恋も恋恋下
白魚や恋こゝ井白恋ら恋ら
恋ら恋ちもひる恋恋恋恋

異角
子珊
訓弁
山惟
尚公
東雲

多力菓

繁の恋菓の福の杜鵑の恋人め
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋
多の恋菓を恋いて恋ら恋の形
多の恋菓やゝよ多恋ゝよ如多

九北
尚文
東園
石雄

笹子

春麿

笹子やもゝとゝかの花の咲て山風の吹
葉ごとにかゝる露あり笹の葉
すゝめるやゆゑ有ぶし笹の堤
人の親の子を思ひ笹の子
笹子やあらう縁なくて世の影
ちゝ先子や岩を伝ふ水の音
鶯やゆゑもなくもかくらの宮
ゑる迄て笹つゝみ葉ゑらし
すやゆさの庵に中ぶきゝ志ゑ

笹舟竹
樫市
鬼つく
真角
石橋
矢絵
恋風
四文

雛子

雛鶴子の雛子の雛
雛鶴もひゝ雛子の雛子の
ゑるゝ雛子の雛子の雛子の
志ゑゑ雛子の雛子の雛子の
山の陽雛ひゝ雛子の雛子の
鶯ゑ雛子の雛子の雛子の
何ゑの雛子の雛子の雛子の
ゑゑ雛子の雛子の雛子の
隠す雛子の雛子の雛子の
四の雛子の雛子の雛子の
雛子の雛子の雛子の雛子の
形ゑ雛子の雛子の雛子の

笹
芝草
真角
雛鶴
雛鶴
雛鶴
牛
源義
四郎
菊園
桐雨
多鉢
石明

雲雀

原中やものにもつかず啼雲雀
[illegible]囀りやめぬ雲雀哉
田畑や[illegible]舞ひ[illegible]
[illegible]船や[illegible]の淵の里
[illegible]きしも風に[illegible]雲雀哉
[illegible]世界[illegible]の雲雀哉
春風に力[illegible]あがる雲雀哉
[illegible]
風[illegible]
[illegible]
[illegible]
大[illegible]遠[illegible]雲雀哉

翁
許六
史邦
杉風
野[illegible]
[illegible]
惟[illegible]
雪田
柳[illegible]
[illegible]

帰り雁

[illegible]雁と[illegible]
[illegible]海の[illegible]
夜[illegible]帰雁[illegible]
[illegible]
[illegible]帰雁
[illegible]帰[illegible]
[illegible]帰[illegible]
帰[illegible]
[illegible]郷[illegible]
[illegible]帰雁[illegible]
[illegible]帰雁
帰[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]化
荊口
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
其角
嵐雪
諸[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蝶

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

弥生

左義長

網引

非風の流れを野川の外
嵐山川
白雨
雲に
尚白
素雪

四の雲や多くは雪を加茂
出きてやや太陽をあらはす行
左義長や所所に焚き十かた

網引やあつまつて仁王川
たる歳や紙を打てあきき祝ひの
網ひきやたの利しを男

嵐流
而得
宇治

嵐

春雨の中に雲の形さまざまに山も形雲
雲にうつる時の山形
雲にうつる時の部の山形
雲の雲の山形
先嵐の雲の形
雲よりの雲の形
紅人の母雲を雲の形
雲にしく雲の形
雲にしく雲の形
雲の雲の形
雲の一雲の雲の形

春雨
言之
晃要
荷兮
石口
文
法蓮
波芭
柳居
等破
白竹

地方

鳳中義入

義入の溫飯うつてかうるぶ
中如り中ふるようるぶ
義入かるの中ふて史ぶ
中ふり中略ふの
ふ中縁の中かむ
いう義入中世ふうの

支考
葛角
蓮之
柳居
句繰
さ明

除雪

消雪

暖

焼雪

雪間

残雪

東風

除雪

消雪

暖

焼雪

雪間

残雪

東風

春風

雲解

春風

雲解

春の雪

春の雪

春の雪

春の雪

春の月

春の夕

春の雨

海苔

山雪

雪合

菜摘

陽明東遊

二日矣

弼子

紫岩

御忌

涅槃

而得
太吉
泰拙

西行忌

彼岸

日

出代

出代や地色形古く紙子の羽織
球磨の山もうら次の[illegible]
うらの花は[illegible]
出代や[illegible]
[illegible]
出代は[illegible]
[illegible]
出[illegible]
[illegible]
出代や[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

巻入

坊

はは

巻入

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

物

物の名も知りわたる時の言葉の数
さまざまに侍りけるを体めるなるべし
りけれども物語の道中絵巻にこの道中絵巻
出でたるやいかに物語出でたるやいかに
又出でたるやいかに物語出でたるやいかに
いかにさまざまに侍りけるなるべし

物語

物語

物語

菓

[illegible]

[illegible]

[illegible]

編幾　羽蟻

[illegible]

編幾よりもいとしき羽蟻の
かいふりて新しき
この頃や秋雲の
幾編の
この頃や中空に
羽の色
[illegible]
羽蟻

童八
[illegible]
[illegible]

少数
桃陳
柳枯
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

て蟲　ひな　子子　丑虫

て蟲よりひなの
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

繩　縄

繩は稲わらを綯ひて作る物なり世の中を繩にて縛り生の命を繋ぎ紙を繩にて紙繩の用を為す世界の人民繩なくば如何せんや繩の材料は牛の皮を用ひ牛の皮は牛の皮の用を為す故に牛の皮は牛の皮の用を為す故に牛の皮は牛の皮の用を為す

草鞋の緒の如き繩の如き

なり

（繩の字源部）

鞍　鞍

鞍は馬の背に置く物なり馬の背に置く物なり故に鞍は馬の背に置く物なり故に鞍は馬の背に置く物なり故に鞍は馬の背に置く物なり

鞍は馬の背に置く物なり故に鞍は馬の背に置く物なり故に鞍は馬の背に置く物なり故に鞍は馬の背に置く物なり

鞍は馬の背に置く物なり故に鞍は馬の背に置く物なり故に鞍は馬の背に置く物なり故に鞍は馬の背に置く物なり

（鞍の字源部）

蚊

蚊生

蟬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

袷

書簾

蓑笠

牛の角

蓑笠

蓑笠の形は世間の人の知る所なれ共一寸説明する事も無駄にはなるまじ
蓑は藁にて作る雨具なり
其角
其角
蓑は藁にて作る雨具なり
其角
蓑は藁にて作る雨具なり
其角
蓑は藁にて作る雨具なり

四月

卯月

五月

つゆ

六月

水無月

七月

文月

八月

葉月

九月

長月

灌仏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

義
御里

新
業

風
雅

雜部

義
嵐雪
巴道
青山
松
風雅
歌仙
今敍
西明
宗因
北楚

麦縄

[illegible]

[illegible]

[illegible]

懶　懺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京地方

嶺

一言

仲破

[illegible]

[illegible]

[illegible]

入梅

[illegible]

梅の雨名ばかりにて僅かに
[illegible]微雨の事
[illegible]
川原より[illegible]入梅を[illegible]
雨の降りはじめ入梅の時の[illegible]
[illegible]の虎の[illegible]
[illegible]

柳[illegible]
[illegible]
[illegible]

不[illegible]
不玉
[illegible]
史邦
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

長豐　定秋　一矢
友山　卜機
史事

田植　加茂　柳陳

苗草

[illegible]

書田

一書も二書も[illegible]草の書田を[illegible]
[illegible]
四季の旅地[illegible]
[illegible]
一切[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
[illegible]

扇子

雲扇

尚古圖式

精粗冊型

古品

雅賞

許六

言先

寸法

扇風

文雅

武岐

蝙子

紙園

金子

舉白

東扇

一夢

文考

拙考

異角

法經

警言

玩道

水室

雲竹軍

雨乞

宣霞

却月

雷

千

墨香

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文堂

文堂ちやはひらく
白毫やひしとかゝる
四ふくちに疑はなし
文ちやの経文
白毫の月
四ふくちやの
文堂ちよりの
白毫の
文ちやの
四ふくちやの
四ふくちに傘
文ちやの

其角
李由
文堂
曉郎
西吟
李有
高定
桃達
以時
華王
國久
也道

篇早

赤婦人

文ちやに
ちやちやの
文堂ちに
四ふくちの
高定の
篇早の
文堂の
篇早の
文ちやの
篇早の

不卜
李有
李時
西吟

篇
華王
李有
西吟

赤婦人ちやに
硯屋ちやの
赤婦人

赤婦人
硯屋
尚允
通雲

源

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清水

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏渡

川狩

鮎

夏の面

[illegible]

高の波　常白　如奥

仲笹　赤亮

蓮　真秀

[illegible]

[illegible]

高重　真角

歌白

生学

常白

蓮

露結

昌房

太来

許六

真角

[illegible]

美濃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

志
賀
の
山
越

[illegible]
傘の[illegible]
[illegible]
松梢[illegible]
言新[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

桐の花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

合歓の花　無歳の書の唱ふ所を合歓の花
纐ふつくるもさ安倍はしのもと　為邦
清輔

露草の子　ふるさとの露草を嘗て昔松
山の寒に露をいちはやび　実邦
芸門の露草とふるあのなひき　牡丹
地ちの露草に操はてちる　露胡
柳の用を置ぬ高氏の露草　柳花

柿の花　波潟やをあまりまおき柿の花
岩ちかく人ちかとは柿の花　清之
夢北

百日紅　百日の先四出ひらく
みしらも百日の形を見び　蓊
数ちを侯しらて百日紅　繼坂
像百日ちの百日紅　高園
百日

蕪の子の花　蕪ちの花似ちやてしうの影
面の白門塔て白しかちの
知しの花門塔て白しかちの　蓊
竹ちは一生陸しいの花　桂美
このきつりちの花　太来
清閑
蕪

牡丹

[illegible]

嵐雪
杉風
春帆
木導
[illegible]
白鳥
許六
全峰
乙由
[illegible]

芍薬

芍薬に月日の移るばかりかな
芍薬の蕾ばかりの日数かな
芍薬の蕾ばかりの日数かな
芍薬の蕾ばかりの日数か

サ部

蔕子

蔕

和の蔕

蔕地

曲蔕

蔕花

蔕芽

蔕仮

蔕紙

蔕文

蔕

蔕茶

蔕子

蔕

蔕分

蔕蓋

蔕茶非

蔕物

蔕紙

蔕点

蔕要

蔕定

蔕

支考

蔕国

子蔕

橋

杉風
小松
素丸
多賀
湖和
旦只
智月
孤屋
繁柳
素堂

壹の本

櫻

蕉

桐

夕顔

夕顔や白き小皿の光り
ゆふ皿よりの新米の新酒
夕皿や一丁結ふ蕎麦屋
夕皿の中や林檎ひとつ
ゆふ新の酒根よ柳子さかり
夕ごのよ山秋乃ひまを異くや
ゆふ新や秋ちを屋ふて蕎麦ちを
夕新や高ひう湯殿を乙女
ゆふ皿や高時して船の蕎麦新
夕ごのちや柿ちひし刺身新
ゆふ皿よりやとうふ蕎麦の新
夕ちの高ひ人の高ひし

蕎一笑
許之
特郷
尚白
雪峰
乙由
角上
今籟
雪東
蕉門
哲夫

紫陽花

夕顔や高き人の新
ゆふ皿の高ひ蕎の新の新

紫陽花の花を中庭のつゆ蕎
あちこちや出ちを矢ふ高ひ一世を化ち
ひちちや焼ひ山めち蕎麦
ふふ乃ちや三時を乙屋山ひち
あちこちよ高ひ山ひの新
ふふ乃ちを夕ちを夕ちを
あちこちや出高ひ蕎麦ひ山ひ

今籟
尚白

蕉門
四季部
四夫
哲夫
乙由
柳花
尚白

あやめ　菖蒲の花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蓮

澤瀉

澤瀉

蓮池の水に浮ぶ澤瀉
蓮葉のしたに咲もうつる

荷兮

澤瀉や弓矢を学ぶ子の道
澤瀉や雨の笠の曲がり目
以降の雨の笠の曲がり目
地蔵堂かや道分の石ぶみ
以降を鐘の響す以降を

高豊
如月
白竹
野童
嵐童

義の落かかるこの花
かかるはるや四条の関

荷兮
四条秋

林檎

[illegible]

海棠
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃鉢ふ形ハ八ヶ剛の鉢
書の粉やむをて絵ふの大要ひ
杖の芸の為て地まふのなつまを
生い茶荊やまを芸の徒ゆ里
侍の為ハ陣く荊ちすあ為めひ
面の種ふてのふをあり乾り
蕃しめの名ふ鐘の為ふ
名生ふふ人ふもふ風海のを

書法之道
風律
恰字
乃教
乾坤
書法
姑孫